

1987 [昭和62年]

宮崎港が開港

物流・観光の推進

昭和62（1987）年6月3日、待望の宮崎港開港記念式典が開催された。本県にとって県中央部に大型船が入港できる港を持つことは、置県以来の重要課題であった。大淀川の河口に位置する本港は、港口を北側に開く大型港湾として計画され、昭和32（1957）年から港湾改修事業が開始されていた。

物流や観光面への大きな期待だけではなく、新しい文化の創出という時代の要請に向かって開かれたという意味も大きい。

宮崎港の開港によって、海が国際化の拠点・新しい道として位置づけられた。



1983 [昭和58年]

置県100年記念式典

県勢の発展を誓う

明治16（1883）年、鹿児島県から宮崎県を分置して以来、昭和58（1983）年で本県は「置県100年」の年を迎えた。

「置県100年」を祝う記念式典は、昭和58（1983）年5月28日、宮崎市の市民会館で開催された。ブラジルからの訪問団32人をはじめ1800人が出席し、次の100年に向かって県勢の発展と飛躍を誓う式典となった。式典は北郷町潮嶽神社の「しし舞」で開幕し、松形知事が、今後の課題に取り組む決意を述べた。置県100年を記念して、宮崎大学農学部跡地に、県総合文化公園を建設する構想、新ひむかづくり運動の展開など、力強い郷土づくりに県民の英知を結集することを呼びかけた。



歴史をつなぎ
未来へつなぐ

宮崎市街地

1994 [平成6年]

フォレストピア学びの森学校開校

全国初の公立中高一貫教育校

21世紀の日本を担い、国際社会で活躍する人材を育成しようとするリーディング・プロジェクトの1つとして昭和62（1987）年に「フォレストピア宮崎構想」が発表された。フォレストピア宮崎構想とは、県北西部の高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村の3町2村をモデル圏域（フォレストピア圏域）とし、森林の持つ様々な機能と山村固有の伝統的な生活文化を活かした交流及び施設設備を目指すなど、新しい山村を創ろうとするものであり、「すこやかな森」、「学びの森」、「体験の森」の3つの森林ゾーンからなる「人間性回復の森林」の整備を進めてきた。そして、平成6（1994）年に全国初となる公立中高一貫教育校の宮崎県立五ヶ瀬中学校、宮崎県立五ヶ瀬高等学校が設立された。その後、学校教育法の一部改正により、平成11（1999）年全国最初の中等教育学校、現在のフォレストピア学びの森 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に校名を変更された。

1学年40名の中全寮制。1学年から3学年までを前期課程、4学年から6学年までを後期課程とし、高等学校に相当する後期課程は全日制普通科であり、6年間を見通した教育活動を展開している。



1993 [平成5年]

宮崎学園都市完成

日本で2番目の学園都市

宮崎大学を核とした住宅都市「学園木花台」や工業団地・福祉施設などを擁する都市。筑波研究学園都市に続き日本で2番目の学園都市として竣工された。

宮崎県では、当時第2次産業が脆弱であり、大学も人文科学系統の学部が全くなく、若年層の流出が大きな問題となっていた。

その問題解決として、「宮崎大学の移転とキャンパス統合による都市整備・拡充」という宮崎学園都市構想が浮上した。あわせて宮崎都市圏の人口増加に対応するために住宅地の整備も必要とされていた。

そこで「宮崎大学の移転とキャンパスの統合による拡充」と「住宅地の開発」を軸として、進められた。

昭和47（1972）年に宮崎大学の移転とキャンパスの統合が決定し、その後各学部の移転が行われ、全学部の移転が昭和63（1988）年に完了、宮崎学園都市全体としても平成5（1993）年2月に完成し竣工式典が行われた。



昭和五十（一九七五）年、県庁本館とともに本県の歴史的建造物であった橋橋が新橋橋となって開通した。都市美を象徴した橋梁も新時代に向かって姿を変えた。

国内有数の森林資源を持つ本県では、豊かな山村地域に育まれた生活文化を学び伝えるためにフォレストピア（森林理想郷）構想を推進し、平成六（一九九四）年に全国初の公立中高一貫校（現県立五ヶ瀬中等教育学校）を設立した。五ヶ瀬町の恵まれた自然の中で感性を磨き、一人ひとりの個性を開発する教育を通して、眼を世界に開き、未来を切り拓く、創造性豊かで主体的に生きる人間の育成を推進している。

昭和六十二（一九八七）年、国民の余暇活動の充実、民間活力導入による内需拡大を目的とする総合保養地域整備法（リゾート法）が施行され、全国各地でリゾート計画が相次いだ。本県では、「宮崎・日南海岸リゾート構想」がリゾート法第一号として指定を受けた。

その後、バブル経済が崩壊し、全国的に計画頓挫が相次ぐ中、平成六（一九九四）年、同構想の中核施設として、宮崎市にシーガイアがグランドオープンした。平成十二（二〇〇〇）年七月には九州・沖縄サミット宮崎外相会合が開催され、令和五（二〇二三）年四月にはG7宮崎農業大臣会合の舞台となるなど、現在もなお本県観光の中核となっている。

平成八（一九九六）年、地方空港としては、新千歳・福岡空港に次いで三番目にJR宮崎空港連絡鉄道が開通し、特に県北からの空港へのアクセスが格段に改善された。

また高速道については平成十二（二〇〇〇）年以降、東九州自動車道の整備が着実に進展し、平成二十八（二〇一六）年には北九州市から宮崎市まで全線開通するなど、「東九州新時代の幕が開けた。」

さらに令和四（二〇二二）年には、宮崎カーフェリーの新船「たちほ」と「ろっころ」が四半世紀ぶりに就航し、「本県経済の生命線」として期待を集めている。

南九州地域は、日本の食料基地として野菜・プロイラー・肉用牛・豚など全国有数の生産地である。本県の農業産出額も常に全国上位を占めており、国内有数の食料生産県として知られている。

平成二十二（二〇一〇）年四月、都農町で口蹄疫第一例が発生、翌日には川南町での発生が確認され、その後、児湯郡を中心に感染エリアが広がり、国内では前例のない規模に拡大した。県は口蹄疫の非常事態宣言を行い、県民総力戦で口蹄疫と戦い、同年八月「口蹄疫終息宣言」を出すに至った。

この間に殺処分を受けた家畜は、総数三十万頭に及んだが、関係者一丸となった努力の成果が結実し、令和四（二〇二二）年の全国和牛能力共進会において四大会連続となる内閣総理大臣賞を受賞する成果を挙げるに至った。

宮崎県のあゆみ 県勢の発展と充実

2019 [平成31年]

みやざき林業大学校開講

林業県みやざきの未来を支える人材を育成

本県林業の成長産業化に向け、情熱にあふれ確かな知識や技術力を備えた人材の育成を図るため、県林業技術センター（美郷町）を拠点として平成31（2019）年4月に開講。新規就業者を育成する長期課程をはじめ5つの研修コースにより、本県の林業・木材産業が求める人材に対応した総合的な研修を開始した。

名誉校長に、地方創生の担い手育成への参画などで本県との関わりがある株式会社内田洋行代表取締役社長の久保昇氏を迎え、受講生が安心して充実した学生生活を送れるよう、民間企業や林業事業者、行政等の81者からなる大学校運営サポートチームにより、就学・就業・定着を見据えた協力などオールみやざきで支援する体制が立ち上げられた。

長期課程第1期生には、21名が入構し、林業の基礎からICT等最新技術の座学や実習、林業就業に必要な資格取得とともに、インターンシップ等により実践力を身に付け、全員が県内の林業事業者等へ就業した。



2015 [平成27年]

高千穂郷・椎葉山地域の世界農業遺産認定

認定を地域の活性化に

平成27（2015）年12月、高千穂町、日之影町、五ヶ瀬町、諸塚村、椎葉村の5町村からなる高千穂郷・椎葉山地域が本県で初めて世界農業遺産に認定された。

世界農業遺産は、伝統的な農業・農法とそれによって育まれた文化や土地景観、生物多様性に富んだ世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域（農林水産業システム）を、国際連合食糧農業機関（FAO）が認定するものである。

本地域は、面積の92%が森林で、そのほとんどが傾斜地という厳しい条件の中、山肌を縫うように建設された山腹用水路で潤される棚田など、山間地域の環境と共生して、水稻、茶、しいたけ、和牛、木材生産など農林業の複合経営を確立、地域一体となって神楽などの歴史的な文化と共に継承していることが評価され、念願の認定となった。

今回の認定を受け本地域では、「活かす」「育てる」「繋げる」を活動方針として、地域活性化に向けた取組を進めている。



2000 [平成12年]

太平洋・島サミット/G8宮崎外相会合開催

国際会議都市に向けての大きな一歩

平成12（2000）年4月22日、南太平洋フォーラム（SPF）に加盟する16の国と地域による「太平洋・島サミット」が、宮崎市シーガイアのコンベンションセンターで開催された。このように多くの首脳が参加する会議が地方都市で開かれるのは日本で初めてのことであり、会議の成果は「宮崎宣言」として世界中に発信された。

また、同年7月12日から13日には、九州・沖縄サミットの関係閣僚会議である「G8宮崎外相会合」が同会場で開催された。会合では、河野外務大臣が議長を務め、九州・沖縄サミットを通じたキーワードの一つである「より安定した世界」の観点を中心に世界規模の問題や地域情勢について議論が交わされ、紛争予防のための行動計画が「宮崎イニシアティブ」として採択された。

これらの国際会議の成功は、本県が目指す「国際会議都市」の実現への大きな一歩となった。



1996 [平成8年]

JR宮崎空港線開通

航路と鉄道の連携

宮崎空港は、戦後の一時閉鎖を経て、昭和29（1954）年に航空大学の訓練飛行場として再開し、昭和41（1966）年には、新婚旅行ブームを追い風に、地方空港として初めてジェット機が就航した。

その後、平成2（1990）年には、大型ジェット機も就航するなど、空港の利用者数が年々増加したことから、更なるアクセス向上を目的に、平成6（1994）年、JR九州が主体となって日南線から分岐する形で宮崎空港線の建設が開始された。

宮崎空港線は、平成8（1996）年7月18日に、全国で4番目の空港連絡鉄道として開業し、同日には、当時の松形知事や運輸省第四港湾建設局長など関係者約100人の出席のもと、宮崎空港駅で開通式が行われた。



1981 [昭和56年]～

高規格道路ネットワークの整備

ひと・もの・いのちをつなぐ道

九州の西と東では、高速道路などの交通インフラに大きな格差があり、東九州地域は大きく後れをとってきた。このため、関係各県・市町村や民間団体が構成する「東九州自動車道建設促進協議会」や「九州中央自動車道建設促進協議会」等が結成され、政府への陳情など粘り強い活動が続けられてきた。

このような中、東九州自動車道においては、平成28（2016）年4月に宮崎市から北九州市まで一本の高速道路としてつながるという歴史的な節目を迎え、さらに、令和5（2023）年3月には日南市までつながるなど、県内の高規格道路ネットワークの整備が着実に進められているところである。

一方で、東九州自動車道の県南区間や九州中央自動車道、都城志布志道路には、未だミッシングリンクが残されており、南海トラフ地震などの喫緊の課題に対応するためにも、関係者が一丸となり、より一層の取組を進めていく必要がある。



2022 [令和4年]

宮崎カーフェリー 新船就航

宮崎と都市圏とを結ぶ「人とモノの交流を支える架け橋」

「宮崎―神戸」間を運航する宮崎カーフェリーの新船「フェリーたかちほ」が令和4（2022）年4月15日に就航。また、同年10月4日には2隻目の新船「フェリーろっこう」が就航した。

県外からの誘客だけでなく、宮崎から都市部へ農産物等を大量かつ安定的に輸送する長距離フェリー航路は「本県経済の生命線」として、オールみやざきによる支援で、四半世紀ぶりの新船就航となった。

新船は、よりプライベートな空間で船旅を満喫できるよう、旧船と比べ個室を大幅に増加するとともに、「リアフリールーム」やペットと共に宿泊できる「ウィズペットルーム」なども新たに設け、多様なニーズに合わせての利用が可能となった。このほかコンサートやトークショー、グルメフェアなど、船旅ならではの、ゆったりとした時間を楽しめる演出も実施されている。

また、船の大型化によって、トラックの積載台数が増加し、大量輸送機関としてモーダルシフトの推進をはじめ、ドライバーの担い手不足や働き方改革など物流の直面する課題解決につながる事が期待されている。



2010 [平成22年]

口蹄疫

口蹄疫の発生から終息、そして復興

口蹄疫との闘いは、平成22（2010）年4月20日から、8月27日の終息宣言まで、130日間もの長期に及び、ワクチンを接種したものも含め297,808頭もの家畜が犠牲となり、県内経済や県民生活へも多大な影響を及ぼした。

平成22（2010）年4月20日に都農町で1例目が確認された口蹄疫は、児湯郡を中心に感染エリアが広がり、7月4日に宮崎市で最終発生例（292例目）が確認されるまで、5市6町で発生し、移動・搬出制限区域は、宮崎県内で8市11町1村に及んだ。

平成22（2010）年5月18日には、都道府県では初の「口蹄疫非常事態宣言」を行い、畜産関係者のみならず、県民全体も行動の制限を余儀なくされた。

口蹄疫に感染した牛や豚は、殺処分が行われ、埋却された。また、まん延防止のためのワクチン接種と予防的殺処分も実施され、8月27日ようやく終息を迎えた。

口蹄疫の終息後、生産者をはじめ関係者一体となって、「忘れないそして前へ」を合言葉に家畜防疫を標準装備とした畜産業の再生・復興を着実に進めた結果、平成24（2012）年長崎県で開催された第10回全国和牛能力共進会において、本県は「種牛の部」で内閣総理大臣賞を手にし、復興を果たした。

さらに、令和4（2022）年鹿児島県で開催された第12回全国和牛能力共進会においても、新設された7区（脂肪の質評価群）を制するとともに「肉牛の部」で史上初の4大会連続となる内閣総理大臣賞を獲得し、今大会のテーマに掲げられた「和牛新時代」が求められる「和牛のおいしさ」において、「宮崎牛が日本一」であることを証明した。



2004 [平成16年]

第55回全国植樹祭

空と海 心をつなぐ 森づくり

平成16（2004）年4月25日、第55回全国植樹祭が、本県を会場として開催された。今回のテーマは「空と海 心をつなぐ森づくり」で、本県が会場となるのは、31年ぶり2回目である。

25日、天皇・皇后両陛下をお迎えして、西都市で記念式典が挙行された。県内外からの招待者・協力者・出演者など総勢約1万人が出席して、西都原の会場を埋めた。

国土緑化推進機構会長の河野洋平氏が「国民参加の森づくりを強力に進めたい」と挨拶し、天皇陛下のお言葉に続いて、緑化運動ポスター入賞者や、緑化運動功労者などの表彰があり、両陛下がイチイカシ、オビスギなどをお手植えされた。

アトラクションでは、本県出身のカウンターテナー米良美一氏が出演して、幻想的な音楽で盛り上げた。式典前後して約7000人の招待者が、西都市南方の「向陵の丘」で植樹を行い、ヤマザクラとオビスギなど8450本の苗木を植えた。

両陛下は、御陵墓参考地の男狭穂塚、女狭穂塚に参詣された後、県立西都原考古博物館を見学され、その後佐土原町の県工業技術センターを視察された。





昭和54年 第34回国民体育大会

1979 [昭和54年]

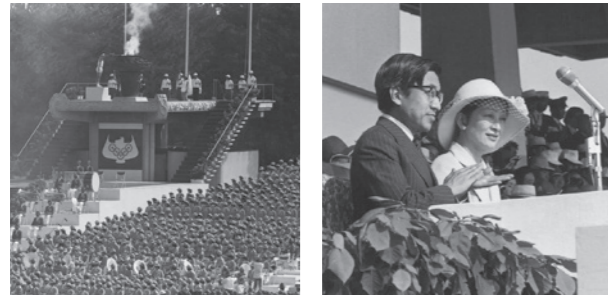
第15回全国身体障害者スポーツ大会開催

ふれあう心・あふれる力・伸びゆく郷土

第15回全国身体障害者スポーツ大会は、昭和54(1979)年10月27日・28日「ふれあう心・あふれる力・伸びゆく郷土」をスローガンに、県総合運動公園で開催された。

皇太子ご夫妻をお迎えして開会式が行われ、晴れ渡った青空にファンファーレが高らかに響いた。スタンドを埋めた2万7000人の観客から、拍手と歓声が湧き起こった。

参加選手は47都道府県と9政令都市から、大会史上最高の902人。大会は2日間にわたって行われ、第1日は車いすバスケットなど5競技、第2日は陸上・卓球など6競技が実施された。



1979 [昭和54年]

第34回国民体育大会開催

日本のふるさと 宮崎国体

本県は、昭和54(1979)年に「日本のふるさと宮崎国体」と名づけて第34回国民体育大会を開催した。

夏季大会は、9月16日から4日間、県総合運動公園水泳場を主会場に開かれ、本県選手は4競技に史上最高の156人が参加して熱戦を展開した。成年女子100m平泳ぎで平野美幸選手(旭化成)の優勝をはじめ、水球、漕艇、ヨットなどで女性選手の活躍が目立った。

秋季大会は10月14日から6日間、県総合運動公園陸上競技場を主会場に、県内9市6町2村の会場で開催され、本県選手は25競技に907人が参加した。

男女総合優勝をめざして各競技とも熱戦を展開し、11競技20種目の優勝を果たし、天皇杯・皇后杯を獲得した。

この国体を契機にして、本県のスポーツは著しく発展した。



1995 [平成7年]

県総合文化公園グランドオープン

県央の一大文化ゾーンの完成

宮崎県の「置県100年記念事業」として昭和58(1983)年に以降整備を進めてきた県総合文化公園が、平成7(1995)年10月16日、グランドオープンした。県立美術館で開かれた記念式典で、松形知事は「まさに宮崎の文化元年。リゾート宮崎、農林水産の宮崎などいろいろな顔を持つ宮崎に、文化の薫り高い宮崎という新しい顔が加わった」と挨拶した。

県総合文化公園は、宮崎大学農学部跡地16.5ヘクタールを利用して、総事業費約400億円の県単独事業として整備を始めた。昭和63(1988)年県立図書館、平成元(1989)年に県民広場、平成5(1993)年に芸術劇場と次々にオープンした。

隣接して宮崎神宮や県総合博物館もあり、本県の一大文化ゾーンが完成した。



1993 [平成5年]

第10回世界ベテランズ陸上競技選手権大会

生涯スポーツの祭典

平成5(1993)年10月7日から17日までの11日間県総合運動公園陸上競技場にて生涯スポーツの祭典「第10回世界ベテランズ陸上選手権宮崎大会」が開催された。

第10回の記念大会で、アジアでは初めての開催となった。大会には、元五輪選手のフランク・シューター(米国)、君原健二、宗猛選手ら特別招待選手を含む男子40歳、女子35歳以上の陸上競技愛好者など、世界71カ国の地域から過去最多となる約1万2000人が参加した。

10月9日に行われた開会式には、秋篠宮ご夫妻もご出席され、選手観客約2万人が参加した。開会式では幼稚園児のマスゲームや太鼓でつづるプロローグ「神々の饗宴」に続き、アルゼンチン選手団を先頭に約5000人の選手、役員による入場行進が行われた。

高齢化、情報化、国際化が進む中、「変化と交流の時代」にふさわしく各選手が年齢に応じ、力を発揮し熱戦を繰り広げた。国境を越えたスポーツ交流は、県民に数多くの友情と感動のドラマを残した。



宮崎県のあゆみ

スポーツ・文化の発信

本県では、昭和五十四(一九七九)年の第三十四回国民体育大会「日本のふるさと宮崎国体」の開催に向け、当時東洋一の規模といわれた県総合運動公園の整備を皮切りに、県内各地に充実した運動施設が整備されてきた。

同三十四(一九五九)年の読売巨人軍宮崎キャンプ以来、プロスポーツキャンプの受入を行っていたが、平成八(一九九六)年、県は、スポーツを通じた交流人口の増加による経済の活性化のため、官民一体となった「スポーツランドみやざき推進協議会」を設立し、広報や受入体制整備、キャンプ・合宿誘致活動を積極的に展開した。

本県の年間を通じて温暖な気候と、県内各地の充実した施設、そして、おもてなしの県民性と相まって、各種のスポーツ大会会場やプロスポーツチームのキャンプ地として利用されるようになった。

平成十三(二〇〇一)年には、日本スポーツマスターズ2001が行われ、翌年には2002サッカーワールドカップのドイツ代表チームと、スウェーデン代表チームのキャンプ地となった。

平成十五(二〇〇三)年には、宮崎市に生目の杜運動公園がオープンし、ソフトバンクホークスのキャンプ地として、キャンプ時期には、九州全域から多くのファンを集めている。

平成二十一(二〇〇九)年には、第二十二回全国スポーツ・レクリエーション祭、令和元(二〇一九)年には、ワールドサーフィンゲームスが開催された。

近年でも、令和五(二〇二三)年二月に、同年三月に開催された第五回WBC(ワールド・ベースボール・クラシッ

ク)日本代表の強化合宿が開催されるとともに、屋外型トレーニングセンター(アミノバイタルトレーニングセンター)・同年四月開業を、整備するなど、「スポーツランドみやざき」を積極的にPRしている。

明治時代後半、本県でもようやくジャーナリズムの発達が見られ、新聞・雑誌の発行がはじまった。大正時代、日豊本線の全線開通や教育の普及により識字率が高まって購読者層が増えたことなどから、大きく発展した。昭和に入り、戦時体制の強化から、言論統制とパルプ資源節約などを背景に一紙化が進み、昭和十五(一九四〇)年、本県では日向日新聞が創刊された。

昭和五十八(一九八三)年、置県一〇〇年を迎え、文化の三大事業として「総合文化公園づくり」、「県史編さん」、「新ひむかくり運動」に取り組み、同六十三(一九八八)年に県立図書館が完成、平成五(一九九三)年に県立芸術劇場、同七(一九九五)年に県立美術館が完成した。芸術劇場では、同八(一九九六)年に第一回「宮崎国際室内楽音楽祭」が開催され、世界的な音楽家アイザック・スターン氏が来県した。

また、平成二十一(二〇一〇)年には、第三十四回全国高等学校総合文化祭が「とき放て創造の力 熱き太陽の光と共に」をテーマに開催された。

さらに令和三(二〇二一)年には、国文祭・芸文祭みやざき2020が「山の幸 海の幸 いざ神話の源流へ」をテーマに開催され、本県の文化を県内外に発信するとともに、県民が本県文化の魅力に改めて触れる貴重な機会を創出した。

2017 [平成29年]

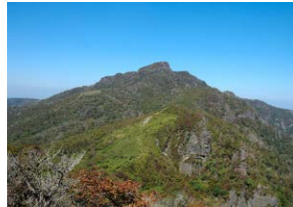
祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク登録

尖峰と渓谷が育む森と水、いのちの営みを次世代へ

平成29(2017)年6月、宮崎県(延岡市・高千穂町・日之影町)と大分県(佐伯市・竹田市・豊後大野市)にまたがる祖母・傾・大崩山系とその周辺地域がユネスコエコパークに登録された。

ユネスコエコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的として、昭和51(1976)年にユネスコが設けた世界的なモデル地域で、本県では綾ユネスコエコパークに続いて2カ所目の登録となった。

祖母・傾・大崩地域は、急峻で独特な景観美を有する山々が重なり、ブナやモミなどの原生林が広がるとともに、特別天然記念物であるニホンカモシカをはじめ希少動植物の宝庫としても知られており、自然と人が共生する暮らしを続けながら、次世代へしっかりと受け継いでいくことを活動理念として、地域住民や関係団体等が一体となって取組を進めている。



2021 [令和3年]

第35回国民文化祭・みやざき2020 第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会

県内の文化芸術を全国へ発信

第35回国民文化祭・みやざき2020、第20回全国障害者芸術・文化祭みやざき大会は、新型コロナウイルス感染拡大により令和2(2020)年度の開催を延期し、令和3(2021)年7月3日から10月17日まで開催した。

本大会は、「山の幸 海の幸 いざ神話の源流へ」をキャッチフレーズに、天皇后両陛下がオンラインで御臨席のもと幕を開けた。

会期中は、県及び市町村実行委員会の主催事業として、県内各地で地域色にあふれた様々な分野の110事業と、令和2(2020)年度開催のさがしげプログラム34事業を合わせ、144の事業について感染症対策を講じながら実施し、関連事業等を含め延べ約56万人が参加した。

また、リモートによる出演やオンライン配信なども活用し、宮崎の文化を県内外へ発信し、県民が本県文化の魅力に改めて触れる貴重な機会を創出した。



2010 [平成22年]

第34回全国高等学校総合文化祭

文化系活動のインターハイ

平成22(2010)年8月1日から5日にかけて第34回全国高等学校総合文化祭が開催された。

演劇、郷土芸能、日本音楽など24部門に、全国から延べ2700校の約2万人が参加し、「とき放て創造の力 熱き太陽の光と共に」をテーマに成果を発表した。

総合開会式は宮崎市民文化ホールで行われ、宮崎県内の高校生と教員約1000人が出演と運営を担い、器楽演奏から「船出」をテーマにした構成劇など多彩なステージが繰り広げられた。秋篠宮ご夫妻や次女の佳子様をはじめ約1700名の観客を迎えた。

開会式に続いて、橋通りで約2000人によるパレードも行われた。



2019 [令和元年]

2019 ISAワールドサーフィンゲームス

世界のトップサーファーが宮崎に集結

令和元(2019)年9月7日から15日にかけて、2019 ISAワールドサーフィンゲームスが、宮崎市の木崎浜で開催された。

本大会は、サーフィンの世界チャンピオンと国のランキングを決定する選手権であり、世界を目指すサーファーにとっては、「サーフィンのワールドカップ」として認知されている。

また、東京オリンピック2020の出場選考も兼ね、世界のトッププロが出場することもあり、世界中から注目を集めた。

本大会は、55の国と地域から約400人の選手・スタッフが参加するとともに、9日間の開催期間中、延べ8万8000人の観客が訪れた。

国際サーフィン連盟 (ISA) のアギーレ会長をはじめ関係者からは、本県の世界レベルのサーフィン環境と受入体制の素晴らしさが評価され、「サーフランドみやざき」を世界に向けて大いにPRする機会となった。



2001 [平成13年]

新県営野球場 「サンマリノスタジアム宮崎」オープン

太陽と海の新球場

平成13(2001)年2月25日、宮崎市熊野に新県営野球場「サンマリノスタジアム宮崎」が開場した。

記念試合として巨人一広島島のオープン戦が行われ、県内外から3万人のファンが押し寄せた。同球場の名付け親の一人、巨人の長嶋茂雄監督をバッテリーに迎え、松形知事の始球式で試合が開始された。

本県田野町出身の木村拓也選手や、巨人の松井秀喜選手が出場し、球場を揺るがす拍手が起こった。同球場は、国内3番目の内外野天然芝の球場で、総工費137億円をかけて完成した。



2009 [平成21年]

第22回全国スポーツレクリエーション祭 「スポレクみやざき2009」

皆こね 笑顔まんかい 神話の国

全国47都道府県のスポーツ愛好者が参集する「スポレクみやざき2009」が、平成21(2009)年10月17日開会した。

午後0時半から、会場の県総合運動公園陸上競技場で開会行事が行われ、全国から選手・監督・観客など約1万5000人が参集した。

会場では、東原知事が「ようこそ宮崎へ」と歓迎して開会を宣言し、主催者の鈴木寛文部科学副大臣が、「スポーツ活動を通じて、国内外の選手と交流の輪を広げてほしい」と挨拶した。大会は県内15市町を会場にして24種目の競技を20日まで繰り広げた。



1996 [平成8年]

第1回「宮崎国際室内楽音楽祭」

宮崎に「世界の音」が響く

平成8(1996)年3月12日、「宮崎はアイザック・スターン氏のヴァイオリンで春がきます」をキャッチフレーズに、第1回宮崎国際室内楽音楽祭が始まった。

国内有数のコンサート専用ホールを持つ県立芸術劇場で、記念すべき第一夜が開幕した。今世紀最後の巨匠と呼ばれるアイザック・スターン氏のヴァイオリンを聴こうと、福岡県・佐賀県などからも団体の大型バスが詰めかけた。

初日は、世界の頂点に立つスターン氏とイエフム・ブロンフマン氏のデュオ・リサイタルで、モーツァルト、ブラームスのヴァイオリンソナタなどで聴衆を魅了した。



2002 [平成14年]～

国内外代表チームのキャンプ合宿受入

「国際水準のスポーツの聖地みやざき」への飛躍

平成14(2002)年に日本と韓国で共同開催されたFIFAワールドカップサッカー大会では、宮崎市が全国で唯一、1つの自治体で2カ国(ドイツ・スウェーデン)の代表チームの事前合宿地として選ばれた。

これを皮切りに、本県の優れた受入環境が高く評価され、ラグビーの日本代表やイングランド代表の合宿、WBC日本代表「侍ジャパン」の4回連続となる強化合宿など、国内外のトップチームを相次いで受け入れることとなった。

特に、令和3(2021)年に開催された東京2020オリンピック・パラリンピックでは、ドイツ陸上チームやアメリカ女子サッカーチームなど、6競技・8カ国の代表12チームを受け入れ、その全ての競技でメダルを獲得しており「縁起の良い」「結果の出る」合宿地として本県の評価が高まった。

さらに、令和5(2023)年4月の屋外型トレーニングセンター供用開始により、トップアスリートの合宿環境が充実していくことで、「国際水準のスポーツの聖地みやざき」としてのブランド力向上などが期待される。

